投　稿

海洋島小笠原の自然の成り立ちと人々の暮らし

堀越　和夫（ＮＰＯ法人小笠原自然文化研究所理事長）

昨年末より、小笠原諸島に新しい島が誕生した話題が巷を賑わしています。小笠原諸島は、海底火山の活動により大洋のまっただ中に約4,800万年前より形成された島々であり、現在も溶岩の噴出により新たな島が造られているのです。これらの島々は、琉球列島のように大陸が分断してできた「大陸島」とは異なり、一度も大陸とつながったことのない「海洋島」と呼ばれています。何もない火山岩でできた島々が、樹林で覆われ、独特の生き物たちが暮らすような現在の小笠原の姿になるまでには、大変長い年月がかかっています。

おそらく一番初めに岩石の島に降り立ったのは、海洋で生活するアホウドリやミズナギドリなどの海鳥たちではないでしょうか。危険な捕食動物がいない安全な場所として、海鳥たちの集団繁殖地が出来上がって行ったと思います。岩は、風と波の作用で少しずつ細かな土壌に変わり、それに海鳥の糞や死骸が植物の生育に必要な栄養を与えます。薄い土壌には、海鳥の羽に付いていた草などの小さな種が根付き、岩しかない島は、やがて海鳥と草地の生態系として息吹いたのでしょう。その後、枯れた植物自身も分解されて土壌が厚くなり、海流によって運ばれる樹木の種が育つ環境が整い、やがて緑の森ができあがってきたと考えられます。

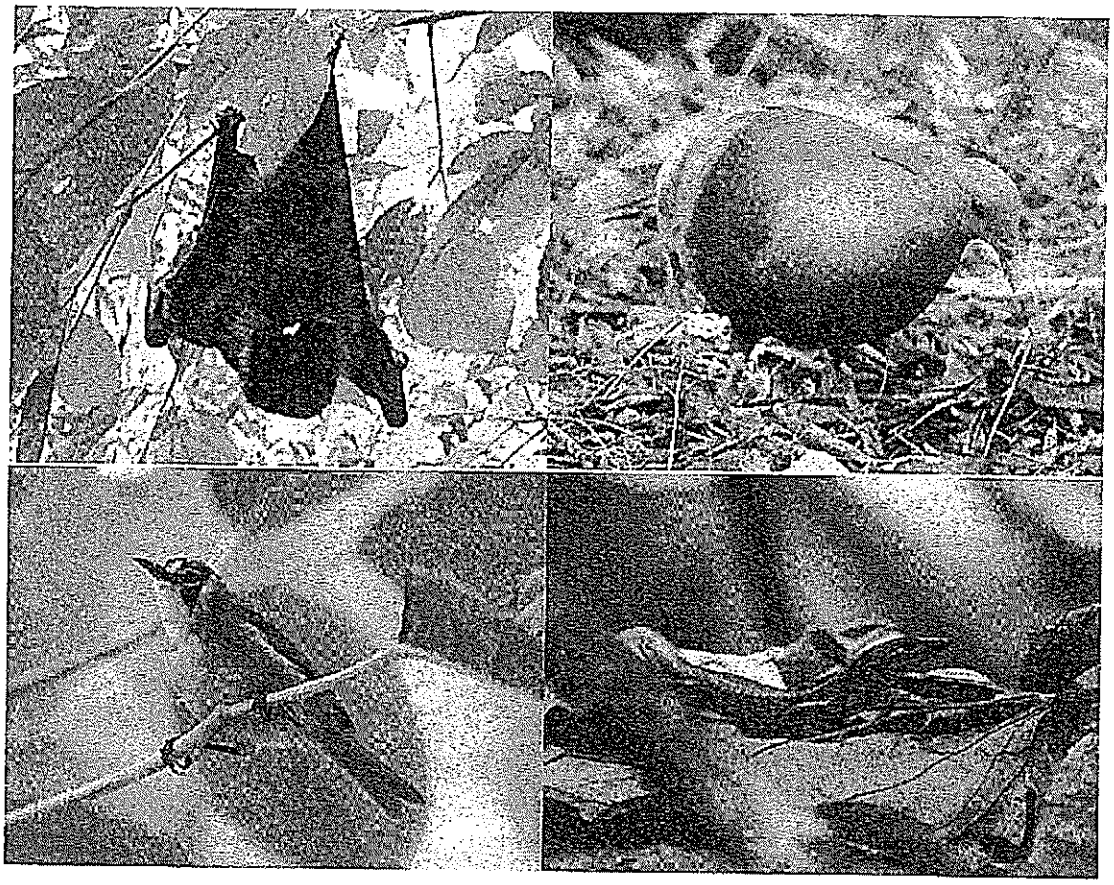
ここまでくれば、島で暮らす動物たちの種類も増えてきます。ただし、この海洋島に辿り着けるのは、1,000キロ以上もの海を越えることができる特定の生き物に限られます。コウモリ、鳥、トンボなどの自らが飛翔できる動物、風に飛ばされたり鳥などに付着して運ばれる小さな昆虫類、流木などに乗って分散するトカゲやカミキリムシの仲間たちです。しかし、やっと辿り着いても簡単に住み着けるわけではありません。数が少ない時は、繁殖相手に巡り会うことも難しく、また台風などの環境撹乱で簡単に絶滅してしまいます。海洋島の生き物は、辿り着きと絶滅の間で、うまく適応し、定着できたものたちです。また、島の誕生以来、長期間地理的に隔離されていたため、形態や行動が進化して、世界でもここしか見られない種類「固有種」が多く誕生しました。「東洋のガラパゴス」と称される小笠原諸島では、独自に進化した植物を構成要素とした森林や草地に、限られた種類の動物たちが暮らす特異な生態系が形成されているのです。2011年６月、小笠原諸島は、海洋島の独特な生物進化の過程を示す見本として世界自然遺産に登録されています。

小笠原諸島は、その歴史においても特異な背景があります。この南海の島々が捕鯨船や探検隊により発見されたのは17世紀で、人間が定住を始めたのは1830年になってからです。最初の島民は、捕鯨船に食料などを供給するために住み着いた欧米人やハワイ人で、日本人が移住してきたのは、明治９年（1876）に領有宣言をしてからでした。亜熱帯気候を生かし、サトウキビ、熱帯果樹、冬野菜の栽培などが行われ、漁業ではカツオ漁、捕鯨、サンゴ漁なども盛んで、太平洋戦争で強制疎開させられる前には7,000人を超える人々が暮らしていました。戦後、一部の欧米系島民しか帰島を許されなかった23年間の米軍統治下を経て、昭和43年（1968）の日本領土返還からは戦前に住んでいた島民も帰島しています。現在は、新たに内地から移り住む人々も増えて、父島と母島に約2,500人が暮らしています。

小笠原村の行政管轄は東京都に属し、島を訪れる旅行者は、離島にしては驚くほど都市的機能が整備されているという印象を受けます。品川ナン

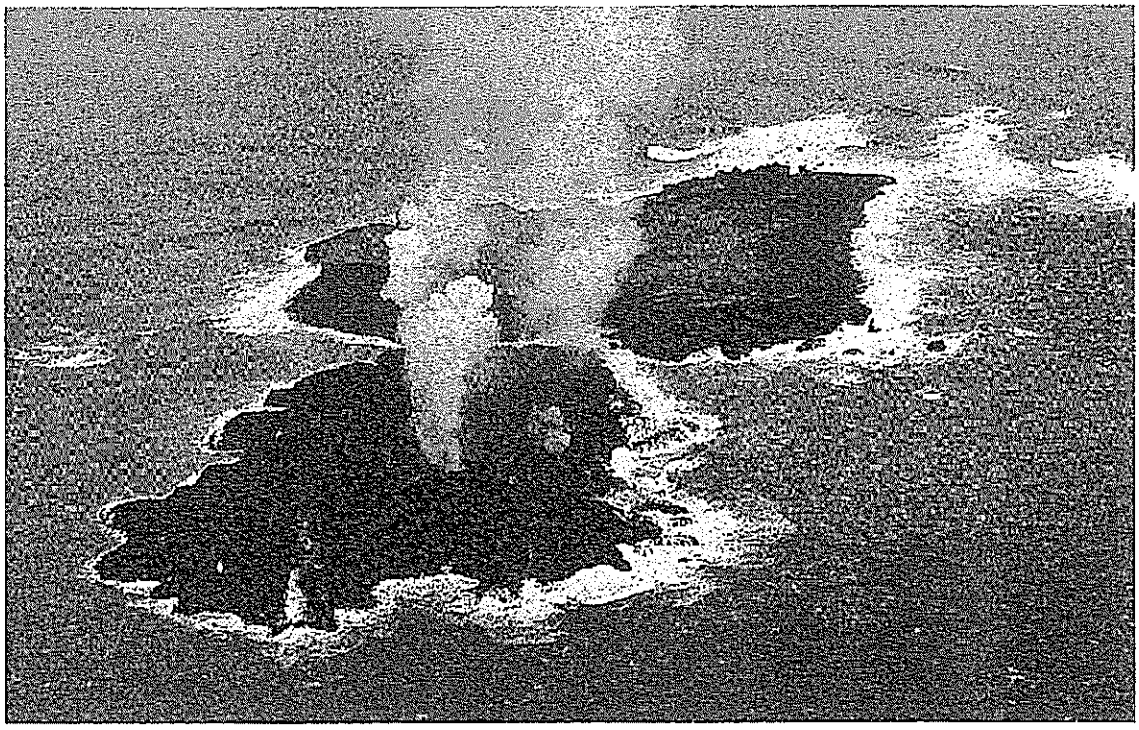
バーの車が歩道付きの舗装道路を走り、集落全域に上下水道が整備されています。私有地が少ないことより、島民の約半数は都営や職員用などの集合住宅で暮らしていますが、南の島暮らしを求めて多くの若者が移り住み、学校からは多くの子どもたちの声が響いています。ただし、内地との連絡は民間の航空路はなく、週一回運行する「おがさわら丸」に限られます。人間も、郵便も、食品を含めた全て物資はこの間隔での輸送になり、ほしい物がすぐに手に入る訳ではありません。また、診療所では手術や出産などは不可能で、緊急時は自衛隊の飛行艇に頼る大きな医療上の制約があります。

最後に、小笠原の暮らしで忘れてはならない特色は、小笠原諸島最大の父島でさえ千代田区の2倍の面積しかなく、島民は自然公園区域と隣合わせの生活をしているという点です。都市公園にウミガメが上陸し、路端には希少植物が生え、天然記念物に指定された鳥やコウモリが庭を訪れます。必然的に猫や犬などのペットたちも、野生動物の生活の場に簡単に接することになります。最近になって、人間が持ち込んだ生きものたちが、知らない間に自然を壊している脅威が判ってきました。もちろんその中には、私たちの生活のパートナーであるペットたちも含まれています。次号では集落で飼われているペットが引き起こす問題と、人と自然との共生を目指した保全活動についてご紹介致します。



小笠原諸島の固有な動物たち（右上から時計回り、アカガシラカラスバト、オガサワラトカゲ、メグロ、オガサワラオオコウモリ）

父島の集落風景



拡大中の新島(左)と西之島(右)、海上保安庁撮影2013年12月26日